論 文

西アフリカにおけるプリント布「パーニュ」を用いた衣服の普及—ブルキナファソ都市部の事例から

在ブルキナファソ日本国大使館 遠 藤 聡 子

服装文化の世界的傾向をみると、洋服が広く行き渡る一方、各地の民族衣装が廃れているという構図がある。しかし、西アフリカを中心とした地域の女性の間では、いずれとも異なる衣装が普及する。19世紀ヨーロッパで最初に製造され、その後西アフリカにもたらされたプリント布「パーニュ」を用い、衣服に仕立てたものである。アフリカの「伝統」衣装ではない、しかし地域に特有の衣服が、女性たちの間で日常着、晴れ着として用いられている。本研究は、ブルキナファソ第二の都市ボボジウラの事例から、現地でのパーニュを用いた衣服の着用を明らかにし、独特の衣服が普及する背景を考察した。

調査地で観察されたパーニュを用いた衣服は形がきわめて多様であり、さらに流行が継続的に移り変わることが明らかになった。このように形が絶え間なく変化する特質が、世界的に普及する洋服と共通しており、パーニュを用いた衣服が地域で支持される背景として考えられた。

1. 研究の目的

現代のサハラ以南アフリカで最も広く行き渡っている服装は、西洋的な既製服、つまり洋服であろう。西欧諸国による植民地支配などを経て、世界各地の文化の西洋化が著しく、「服飾文化に至っては、今日では世界中の服装が洋服に統一されたかに見えるほど」(浜田, 2003: 305)である。サハラ以南アフリカの国々では、20世紀前半頃まで、布の衣服を身につける人と、裸の身体を基調にして、腰みのや耳飾り、腕飾りなどの装飾を身につける、あるいは直接身体に傷痕をつける、色を塗るなどの人為を加えて身体を飾る人が隣り合わせに暮らし、とりわけ後者が多かったが(嶋田, 1990: 448-449; Coquet, 2001: 14)、アフリカ各国が独立した1960年代頃を境に着衣の習慣が急速に広まり、多勢を占めるようになった(嶋田, 1990: 454)。現在では、東アフリカや南部アフリカなどでは、人びとの服装の主流は洋服となり(Mustafa,

1997: 226-227)、洋服が現地流に着こなされている事例などが報告されている(Hansen, 2000など)。世界的に普及する洋服と、そのいっぽうで失われてゆく各地の民族衣装という図式は、アフリカ地域にもあてはまっているようにみえる。

しかし、サハラ以南アフリカには、独特の衣服が根付き現在まで広く普及する地域がある。西アフリカのギニア湾岸諸国を中心とした地域ではパーニュ *pagne*¹⁾ と呼ばれる色鮮やかなプリント布が、内陸部はバザン *bazin* と呼ばれるサテン地に模様を織り出した布が広く用いられ、独特の衣服に仕立てられ身につけられる。本論文で取り上げるパーニュは、ギニア湾岸諸国を中心に、内陸の一部の国、中部アフリカのコンゴ民主共和国までを含む広い地域で用いられる。男性も女性も身につけるが、男性がパーニュをYシャツ等に仕立てズボンと合わせて身につけることが多いのに対して、女性たちの間では、パーニュを用いた上衣とスカートまたは腰から巻く布(以下「巻き布」)、頭などに巻く布の3点という独特のスタイルが日常着、晴れ着として普及している²⁾(写真1)。

パーニュは、はっきりした色と力強い線で描かれた絵柄が特徴のプリント布である。絵柄は、ジャワ更紗を模

2011年2月3日受付, 2011年10月5日受理
連絡先: 01 BP 5560 Ouagadougou 01 Burkina Faso
在ブルキナファソ日本国大使館
e-mail: satoko.endo@mofa.go.jp

写真1. パーニユを用いた衣装をまとった女性たち（筆者撮影）

してアレンジを加えたものや、宗教的なもの、大統領などの肖像、映画祭など行事を記念したものがあるほか、特に印象深いものにキッチュ・デザイン（国立民族学博物館, 2006）と称される柄がある。「扇風機やスプレー缶、皿の上に乗ったチキンの丸焼き」（大野木, 2006: 114）などの「我々では考えられない題材」（大野木, 2006: 114）がみられる。このパーニユの起源は、19世紀にオランダの工場でインドネシア向けに製造されたプリント布にあるとされ、19世紀末に新しい販路を求めて西アフリカの黄金海岸（現在のガーナ）にもたらされたものが、以後広範囲に普及した（Kroese, 1976; Nielsen, 1979; Bickford, 1995 ほか）。

もともとはヨーロッパで製造され、1世紀ほど前に西アフリカにもちこまれたパーニユについては、当然ながら「アフリカの布ではない」という意見がある（Akinwumi, 2008）。しかし、パーニユはアフリカ向けに大きさが変えられ、色・柄が創りだされるなどして（Cassara, 1994: 65）、現在ではアフリカ特有の服地となっているともいえる。このようなアフリカにおける歴史の浅い外来の工業製品が、なぜ地域特有の布となるまでに

アフリカ的な要素を具現化し、広範囲に普及しているのだろうか。世界的に洋服が広まる現代においても、洋服にとってかわられることなく用いられるのはなぜなのか。

もとはオランダでインドネシア向けに生産されたパーニユが、西アフリカにおいて受け入れられた背景には、19世紀末～20世紀初頭にかけて、植民地体制下におけるヨーロッパ諸国の経済的、政治的、軍事的進出によって西アフリカでのヨーロッパの存在の大きさが決定的なものとなり、パーニユのようなヨーロッパ製品の商品的価値が上がったこと、またこの時期に現地で現金経済が急速に拡大したことなどがあったとされる（Bickford, 1995: 39）。また、西アフリカでは古くから布が富の象徴とされ、地域で生産される布も、外来の布も価値を置かれてきた歴史があり、パーニユが持ち込まれた以前にも、やはり色鮮やかな絵柄染めの布であるインドの更紗が好評を博していたことがわかっている（Picton, 1995: 25; Kriger, 2006: 38）。17～18世紀の対西アフリカの貿易で需要のあったインドやヨーロッパの布は、現地産の布と同じあるいは似通った繊維を用い、色やパターンも現地の文化的価値観に沿うようなものが大半を占めたが（Kriger, 2006: 37-39）、その中で、現地にはない商品でありながら非常に好まれていたのが、インド更紗のような色鮮やかな絵柄染めの布であったとされる（Kriger, 2006: 37-39）。つまり、パーニユはそれ自体の歴史が浅いうえに、ヨーロッパの製品であり、その影響力をもって西アフリカで広まった経緯もあることから、地域の「伝統的な」布であるとは言い難いが、しかし地域特有の近代史の中で選び取られ、受け入れられてきた布でもあるといえる。パーニユは1960年前後のアフリカ諸国の独立を契機として、ギニア湾岸諸国を中心とした各国でも製造されるようになり（Cassara, 1994: 70）、現在のようにアフリカでもっとも広く用いられる服地の一つとなった。

パーニユは外来の工業製品ではあるものの、伝統的な価値観から断絶しているのではなく、現地で生産され古くから用いられてきた布と同様の機能や価値をみとめられている。例えば、コートジボワール中央部のバウレの人びとの布生産に関する報告の中で Etienne (1980: 58-59) は、女性たちの間で現地産の布や金製品が財産として扱われていることを述べ、これに加えパーニユもまた、現地産の布よりも価値が低いとみなされながらも、同様に財産として蓄えられていることを指摘している。ほかに、パーニユを扱った研究の中では、パーニユが女性の間で意思伝達の一手段とされている現象を扱ったものが多い（Touré, 1985; Bellow, 1986; Sanata, 1992 など）。パー

図1. ブルキナファソの地図とボボジュラソ（筆者作図）

ニュは商人や着用者の女性たちによって絵柄に呼称がつけられ、時にそれが着用者のメッセージとして用いられるとされる。呼称の種類は政治、経済、社会、文化など広範囲にわたり（Touré, 1985）、特定の絵柄に対し想像力を働かせた呼称がつけられる。例えばある爪（に似たもの）の絵柄は、「マダム・ウフエ（コートジボワール初代大統領夫人）の爪」と呼ばれてファースト・レディへの憧れを表し、足跡が並ぶ絵柄は「君の足私の足」と呼ばれ、いつも夫や恋人と一緒にいたい女性の心情を表しているとされる（Touré, 1985）。この絵柄の呼称に関して Domowitz（1992）は、コートジボワールやガーナに暮らすアカンの人びとの間では、パーニュが持ち込まれる以前から現地産の布の模様にとわざや出来事などから由来した名前がつけられてきたとしている。これもまた、パーニュが在来の布と同様の機能を持っている例と考えることができるだろう。

ブルキナファソ西部農村で、女性の所有する衣服についてその種類、入手方法、着用目的を調査した遠藤（2006）は、調査地区で観察された他の種類の布との比較から、パーニュやパーニュを用いた衣服の特質を明らかにしている。その中で、同村における聞き取りから、パーニュ等工業製品が普及する以前に、現地産の布のみが身につけられていた時期があり、当時女性たちは布を腰や胸から巻いて身につけていたことが明らかになった。同村で観察された主な布4種の中には、巻き布としてのみ身につけられる在来の布ダンファニ／ファソダンファニほか一種³⁾と、仕立てても身につけられるバザンとパーニュがあったが、バザンとパーニュでは仕立てた衣服の形の傾向が異なり、パーニュの仕立の方が形の種類が豊富であることが指摘された。パーニュは、布が財産として重

図2. セクター1の地図と観測地点A

出所：Ministère de l'Économie et des Finances et al.（1997）をもとに筆者作図

要視されてきた西アフリカの社会において、在来の衣装体系の中に違和感なく埋め込まれ、類似の機能を引き継ぎつつ、また、独特の仕立てで女性の装いの選択を広めていると考えることができる。

本研究は、パーニュを用いた衣服が普及する都市の1つである、ブルキナファソ第二の都市ボボジュラソ（図1）を調査地として、パーニュを仕立てた衣服の形に着目し、パーニュの普及とその背景を考えるものである。これまで、西アフリカで普及する女性の衣服の形については、「みたところ無数の形を取りうる⁴⁾」（Picton, 2004: 34）、あるいは「アフリカの仕立屋の創造的なイマジネーションのあらゆるファンタジーがつまっている⁵⁾」（Mendy-Ongoundou, 2002: 64）などと、その多様さが形容されてきたが（同様に Fauque et Wollenweber, 1994: 122）、本研究ではその「無数」の形を整理分類し、パーニュを用いた衣服が人びとの間でどのように着用されているのかをみてみたい。本稿はボボジュラソで観察されたパーニュを用いた衣服の形を整理分類し、定点観測での割合を示すほか、形の起源について文献調査の結果を示す。また、注文仕立によって現地の衣服生産を担う、多くは1～5人程度で営業する小規模な衣服仕立業者（以下「仕立屋」）への聞き取りから、ボボジュラソの女性の社会的背景と上着の形のかかわり、流行について調査結果を報告する。以上から得られた結果をもとに、本研究は西アフリカをはじめとした地域でのパーニュの普及とその背景を考察するものである。

図3. 通行女性の服装におけるパーニュの割合 (N=2,754)

出所：筆者作成

・定点観測中の通行女性 2,574 人の服装を分類したもの。
 ・「パーニュ上下」…パーニュを仕立てた上着とスカート（または巻き布）の組み合わせを着用していた女性。
 「片方パーニュ」…服装の上下いずれかにパーニュを身につけていた女性。ほとんどがTシャツなどの洋服の上着と、パーニュの巻き布の組み合わせである。
 「パーニュ以外」…パーニュを身につけていなかった女性。バザンやその他の服地を用いた衣服や、洋服などがみられた。

2. 調査概要

本研究の調査地であるボボジュラソは、古くから西アフリカの南北を結ぶ交易路上に位置する中継地の一つとして栄えた商業都市であり、現在も、マリのバマコやコートジボワールのアビジャンなど、近隣諸国の大都市へのアクセスがよい。中でも、パーニュ流通の中心地の一つである隣国のコートジボワール、特に経済都市アビジャンは、ブルキナファソの人びとにとって重要な出稼ぎ先であり、地域同士のかかわりは深い。内陸に位置するボボジュラソは、パーニュ流通の中心であるアビジャンやトーゴのロメのようなギニア湾岸の大都市からは離れているが、ボボジュラソの女性の装いを見た場合、パーニュを用いた衣服がもっとも目につく服装である。

本論文のための調査は、ボボジュラソ市内でのパーニュを用いた衣服の上衣の形のスケッチと定点観測、および仕立屋への聞き取りが主な方法である。2004年11月～2005年3月にかけて、市内の女性が身につけるパーニュを用いた衣服の上衣をスケッチすることから始めた。スケッチはボボジュラソの中心地区、セクター1を中心におこなった。上衣は、下半身に身につけるスカートや巻き布に比べて形がより多様であるため、上衣の前面・背面を、より多くの種類を網羅できるように描きとめた。スケッチの総数は98点である。

次に、スケッチの結果を踏まえ、上衣の形に関する定

図4. 「パーニュ上下」の服装における基本モデル別割合 (N=892)

出所：筆者作成

・図3の「パーニュ上下」を身につけていた女性の服装を、上着の基本モデルの種類別に分類したもの。

点観測を実施した。観測地点において、女性の通行人が身につけている上衣を代表的な型ごとに分類しその割合を記録した。観測は、2005年3月9日（水）～15日（火）までの日曜を除く6日間、中央市場から東にのびるヴィサンス通り Rue Vicens 沿いの地点Aにおいて、通行の多い17時～18時の1時間におこなった（図2）。定点観測中、地点Aを通過したすべての女性の服装を対象として⁶⁾、その服地が「パーニュ」か「パーニュ以外」かをまず分類し、服地がパーニュの場合は、その上衣の型を記録した。観測人数は2,574人であったが、このうち、衣服の上下ともパーニュを身につけていた女性、つまり、パーニュの上衣とスカートまたは巻き布を身につけていた女性892人（全体の35%）を、調査の分析対象とした（図3、写真2）。

なお、衣服の上下にパーニュを身につけていた35%のほかに、上下いずれかにパーニュを身につけていた女性が通行者全体の24%を占めた。その多くは下半身にパーニュを身につけ、Tシャツなど洋服の上衣と組み合わせていた（写真3）。両者をあわせると、通行した女性の約6割がなんらかの形でパーニュを身にまとい、パーニュが服地として浸透していることがわかる。パーニュを用いた衣服のほかでは、バザンを仕立てた貫頭衣式の長衣ブーブーなどのほか、洋服もみられた。

西アフリカの多くの都市と同様に、ボボジュラソにおいても仕立屋の数が多く、衣服は既製品を購入するよりも、布の状態で購入し仕立屋に好きな形に仕立ててもらうのが一般的である。客が仕立屋の店に布を持ち込み、店においてある衣服の写真を参考にしたり、あるいは仕

写真2. 衣服の上下にパーニュをまとう例
(筆者撮影)

写真3. 衣服の上下いずれかにパーニュをまとう例。
ここではキャミソールと巻き布 (筆者撮影)

立屋に相談するなどして衣服の形を決める。本論文の調査中に聞き取りをおこなった仕立屋は、ボボジュラソ市内の2つの仕立屋組合に所属する組合員である。組合員の総数約60人のうち、女性服を扱う仕立屋22人の店に通って観察をおこなったが、そのうちの11人には特に詳しく話を聞いた。11人はすべて男性で、彼らの年齢は24～47歳である。彼らには衣服の形と女性の社会的背景の関係性、および流行について話を聞いた。なお、聞き取りをおこなった仕立屋での仕立代金は、市内の平均的なものである。

3. パーニュを用いた衣服の特徴

3.1. 衣服の基本モデル

パーニュを用いた衣服の形は、同じものを見つけるのが困難と思われるほど多様である。しかし観察するうちに、基本となるような型があり、多くの女性が身につけていることがわかった。この基本となる型をここでは「基本モデル」と呼ぶことにする。基本モデルは、仕立屋の間で呼称をつけられよく知られているものであり、西アフリカの他都市の研究で言及されているものもある。以下では、調査中に観察された基本モデルについて、地点Aにおける定点観測の結果をあわせて報告し、基本モデ

ルの種類とその普及割合を報告する。

スケッチを続ける中でよくみかけ、仕立屋への聞き取りでも、ボボジュラソの定番とされていたのは、プラケ Plaqué, エバゼ Evasé, グランメール Grand-mère と呼ばれる3種の基本モデルであった。地点Aにおける定点観測においても、この3種は高い割合を占めた。プラケは、パーニュの上下組の衣服を着て通行した892人のうち30%にあたる272人が身につけもっとも高い割合を占め、エバゼは11% (100人) で2番目、グランメールは7% (62人) で4番目に多かった (図4)。以下にこれら基本モデルを中心に、その形状、製作法、起源などをみてみたい。

3.1.1. プラケ

プラケは、腰までの丈で、ウエストが締まっている上着のデザインを総称する⁷⁾。Plaqué は、公用語である仏語で「張りつけた」という意味であり、体に張りついた形の特徴を示した呼称である (図5, 写真4)。着用者の体の線に忠実なプラケは、体の寸法を測って布に製図をし、裁断、縫製することによって製作される。

プラケの伝播の経緯などについては明らかにできていないが、西洋の衣服を連想させるデザインが多く、その影響が色濃いと推測できる。Picton (2004) や Gott (1994)

図5. プラケの仕立例 (筆者作図)

では、ヨーロッパの商人やキリスト教宣教団とのかかわりによって生み出された西アフリカの衣服に関する記述があり、これらの記録からは具体的な形を特定できないものの、プラケがこのようにヨーロッパの影響を受けた衣服の一つであるとも考えられる。

本研究ではプラケの一種として扱ったが、特にタイユ・バス *Taille basse* (図6) と呼ばれるデザインがある。ウエストの締まった腰丈のデザインである点でプラケといえるが、ウエスト部分で切り返しがあり、そこから下は別布の襷飾りになっている点で他のプラケと区別できる。このタイユ・バスについては先行研究に記述があり、「植民地期に西アフリカ中で作り出された」(Rabine, 2002: 30) 型とされる。また、後にみるグランメールとあわせて、「ヨーロッパの様式がアフリカの美の理想になじんだもの」(Mustafa, 1997: 237) であると記されている。プラケについては詳細が明らかになっていないが、共通点のみられるタイユ・バスについては、植民地期、あるいはそれ以前にヨーロッパの文化との接触の過程で形作られ、植民地期に西アフリカ各地で作られるようになったと推測することができる。

3.1.2. エバゼ

エバゼは腰までの丈で、胸の切り替えから広がる裾が特徴である。*Evasé* は仏語でラッパ型を意味し、その形を形容している (図7, 写真5)。セネガルのダカールのファッションについて記した Mustafa (1997: 237) などでは、仏語でセーラーブラウスを意味するマリニエール *Marinière* の語で記されている (同様に Rabine, 2002: 30)⁸⁾。

エバゼは Rabine (2002: 30) において、後述するグラ

写真4. プラケの仕立例 (筆者撮影)

ンメールを「短くした衣服」と形容されている。起源や製作法については、次項であわせてみることにする。

3.1.3. グランメール

グランメールは、膝下までの長い丈で、胸元と腿の2箇所切り替えのある、ゆったりした衣服である (図8, 写真6)。*Grand-mère* は仏語で「おばあさん」の意味であり、Rabine (2002) によればセネガルでも現地の主要な言語ウォロフ語で「親愛なるおばあちゃん」を意味する *Mama boye* と呼ばれる。

パーニュは、3枚ひと組で販売され、そのうち1枚が上衣にあてられることが多いが、グランメールは、上衣を仕立てるのにパーニュを2枚必要とする。パーニュ1枚の長辺を半分に折ったものを、鋭角を作るように2度折り、その鋭角の頂点から、上・中・下の3つの部分に裁断すると、それぞれ上部は袖、中部は裾、下部は襟元に用いられる。襟元と裾の間に、2枚目のパーニュから切り取った長方形を入れこむと、これが胴部になる。長方形を取った残りは、頭を飾る布とされる。ここで、胴部を入れ込まず、襟元と裾をそのままつなげればエバゼ

図6. タイ・パスの仕立例 (筆者作図)

図7. エバゼの仕立例 (筆者作図)

写真5. エバゼの仕立例 (仕立屋の見本写真。撮影者不明)

写真6. グランメールの仕立例 (筆者撮影)

図8. グランメールの仕立例（筆者作図）

となる。エバゼは、上着1点に1枚のパーニュを用いる。これらエバゼとグランメールは、プラケと異なり、細かい採寸を必要としない。また、ほとんど余りぎれを出さずに布を使い切る。

グランメールは、セネガルのシニャール Signares の発明とされる（Mustafa, 1997: 236; Rabine, 2002: 30; Mendy-Ongoundou, 2002: 59-60）。15世紀以降、交易の為にアフリカの海岸、河岸で暮らしていたポルトガル人と関係を築いていた現地の影響力ある女性たちが、ポルトガル語の女性の敬称 *Senhora* に由来して *Signare* と呼ばれていたとされる（Brooks Jr., 1976: 20）。シニャールはまた、セネガルのゴレ島やサンレイ島のフランス人とウォロフ女性の混血の子孫を指す語とも説明される（Rabine, 2002: 30）。シニャールは、その文化的背景や、母である現地の女性の社会的身分の高さなども手伝って、ヨーロッパ-アフリカ間の貿易の仲介者として有利な地位に

写真7. デミニの仕立例（筆者撮影）

あった（Brooks Jr., 1976: 19）。特に1780年代がシニャールの影響力の絶頂とされるが、このシニャールが、ヨーロッパの衣服の様式を取り入れた新しい衣服を作り出したとされる（Mendy-Ongoundou, 2002: 59-60; Rabine, 2002: 30; Mustafa, 1997: 236）。

3.1.4. デミニほか

地点Aにおける定点観測の結果、ボボジュラソの定番とされるグランメールよりも高い割合（10%）を占め3番目に多かったのは、デミニ（*Demini* か）と呼ばれる基本モデルである（図9；写真7）。太ももほどまでの丈で、袖つきのゆったりした形である。呼び名の由来は、聞き取りからはその簡素でゆったりした形にあると考えられた。貫頭衣式の長衣ブーブーと同様に簡素でゆったりしているが、より丈が短く幅がせまいため、仏語で半分を意味する *demi* と、地域の共通語ジュラ語で小さなものを意味する *ni* が組み合わされたというのである。

デミニは、2004年10月～2005年3月の調査当時に市内いたるところで見かけられた基本モデルであり、

図9. デミニの仕立例（筆者作図）

図10. ヨルバ

(すべて筆者作図)

図11. シャツ

図12. ジャケット風上着

図13. アオザイ風上着

ブームともいえる様相を呈していたが、1年後の2006年4月～2007年3月の滞在時には特に目立たなくなっていた。

このほかには、筒型の胴と袖で飾りのないヨルバ Yoruba / Yoruba (図10), プーブー, 洋服と同じ形のシャツ chemise (図11) などがみられた。ヨルバは、聞き取りによればナイジェリア南西部に居住するヨルバの人びとの衣服に由来するとされる。西アフリカでは19世紀頃からギニア湾岸諸国を中心にキリスト教の布教活

動が盛んになったが、はやくから宣教団が活動していたナイジェリアのアベオクタにおいて、キリスト教信者を中心に、女性の間でそれ以前から身につけられていた巻き布に加え、縫製した上衣が身につけられるようになった (Byfield, 2004: 33)。この上衣は、次第に信者以外の女性の間にも普及し、広くヨルバの女性の間で定着したとされるが (Byfield, 2004: 33), 当時の女性の姿を写した写真 (Byfield, 2004 など) を見ると、現在ヨルバと呼ばれる基本モデルと似た、筒型の胴と袖の上着を身につ

図 14. プラケの仕立例 (筆者作図)

けている姿がみえる。

ブーブーは、大きな布を腕を通す箇所を残して縫い合わせ、頭を通す部分をあけてかぶって身にまとう、簡素で優美な貫頭衣である。西アフリカで8世紀以降、アラブ世界の影響を受けて、内陸部を中心にイスラームが浸透したが、着衣することを求めるイスラームの教えとともに広まったのがこのブーブーとされる⁹⁾。

以上は多くの女性が身につけていた基本モデルであるが、このほかに、ごく少数の女性だけが身につけていたものもある。洋服のジャケットのような仕立(図12)や、アオザイ風の上衣(図13)などのように、調査中にごくまれに観察され、基本モデルに分類できないものもあった。

定点観測の結果をみると、ここでみた基本モデルのうち、上位4種のプラケ、エバゼ、デミニ、グランメールの着用割合の合計が全体の約6割を占めている(図4)。その意味で、パーニュを用いた衣服の形は、かなりパターン化しているというみかたができる。またその一方で、調査中にごく少数の女性しか身につけていなかったジャケットのような形やアオザイ風の形など、パターンから外れた形もみられる点も指摘しておく必要がある。

3.1.5. 女性と基本モデル

身につける基本モデルから、その女性がどのような人か見分けることができるのだろうか。多くの女性と日々接し、彼女たちの身につける衣服を観察している仕立屋の意見を参考にしてみたい。11人の仕立屋への聞き取りや市内での観察によると、ボボジュラソの定番であるプラケ、エバゼ、グランメールの3種の基本モデルは、女性の年齢や社会的地位と結びついて身につけられることがわかった。

ウエストの締まったプラケは、若い未婚女性による着用が多いというのが共通の回答である。「年頃の娘は体の線を強調して、未来の夫となる男性を惹きつける」と説明した仕立屋や、同じ理由から、「妻がプラケを着ることを嫌がる夫が多い」と説明した仕立屋がいた。その他一部には、オフィスで働くようなキャリアウーマンの中には、既婚でもプラケを好んで着る人もいるという意見がきかれた。

腰までの丈で裾がラッパ型に広がるエバゼは、既婚女性、あるいは、未婚ではあるが同世代の女性が既に結婚しているような年齢の女性など、プラケよりも上の年代の女性の間で幅広く身につけられる。かつてはジュラ語で妊娠した女性の服を意味するコノマン・デレケ *Konoman Dereke* という名前と呼ばれていたという回答

写真8. 細い布で筒を作る。筒にアイロンをかける作業中（筆者撮影）。

写真9. 10. 数 cm に切った筒を 2 本ずつ組み合わせ、襟元に縫い付ける（筆者撮影）

写真8～10 ある装飾の製作法

もきかれた。胸元の切り替えから広がる裾が大きなおなかを隠すのである。仕立屋の中には、ブラケを好んでいた若い娘がエバゼを注文すると、その娘が妊娠したのだと思うと語った人もいる。

グランメールは、高年の女性にとっては必需品ともいえる基本モデルである。もし仮におばあさんと呼ばれるような年代の女性が、ブラケやエバゼなどを身につけると、周囲の人から敬われないというのが仕立屋の共通した回答である。反対に、グランメールはあらゆる年代の女性が身につけて好ましいとされ、若い女性が自ら進んで身につけたがりはいらないものの、若い女性がグランメールを身につけることもできる。ある仕立屋は、結婚した20歳の自分の妻に「もう夫を探す必要はないのだから」という理由でグランメールを2着仕立てて贈ったと語っている。

3種それぞれの基本モデルを着用する女性像についての仕立屋の回答は、以上のように年代や社会的地位に關してほぼ一致していた。その他の関連については、例えばボボジュラソの女性の服装について述べた Freidberg が、「服装から民族の手がかりを得ることはほとんどできない」(Freidberg, 1996: 205) としているが、本論文の調査においても民族、あるいは信仰などとの関連はほとんどみられないという回答が大半を占めた。ただし少数意見の中には、一部フルベの人びとだけが好む基本モデルがあるという回答や、キリスト教徒の女性がブラケを好む傾向があるという回答もあった。

パーニュを用いた衣服は、社会的地位や年代によって着用する基本モデルの傾向が異なり、着分けられながら、

幅広い年代の女性の間で身につけられているといえる。また一方で、女性が身につけるパーニュを用いた衣服の基本モデルによって、その民族的属性や信仰を推し量ることは難しいといえる。

3.2. 細部の多様さと流行

前節でみたように、パーニュを用いた衣服は、主要な基本モデルが広く用いられパターン化しているというみかたができる。そのパターン化した衣服が、無数ともいえる多様性を実現しているのは、基本モデルの襟元や袖、裾など各部に様々なカットや装飾が用いられること、あるいはパーニュ以外の服地や素材が合わせて用いられることなどによる。たとえば図14のように、ブラケは締まったウエストが特徴であるが、実に多様なデザインがある。袖だけをみても、袖の有無、つける場合はその長さ、幅、裾のカット、各種の装飾というように、数々の種類がある。

3.2.1. 細部の多様さ

装飾には、洋服を身につける人にはなじみのものも多い。プリーツやギャザー、フリル、タックなどが用いられる。このほかに、パーニュやその他の服地を加工することで、さまざまな装飾が作りだされる。たとえば、布を小さな四角に裁断し、鋭角をつくるように折りたたんだ装飾は仏語で「歯」を意味するダン dent などと呼ばれ、襟元などに並べて用いられる。写真8～10のような、細長い布を筒状にし、それを数センチの長さに切りそろえたものを2本ずつつなげ配置するような、手の込んだ

写真 11. 切り取った絵柄に芯地を貼り付ける (筆者撮影)

写真 12. 別の布をあてて袋状に縫う (筆者撮影)

図 15. モチーフの装飾例 (筆者作図)

・太線がアップリケにした絵柄部分

装飾もみられる。2005 年、および 2006 年～2007 年の調査時に特に多くみられた装飾は、パーニュの絵柄を利用してアップリケをつくるもので、モチーフ motif (仏語で絵柄) と呼ばれていた (図 15, 写真 11～15)。このモチーフは、パーニュの絵柄やその切り取り方によって異なるアップリケができるだけでなく、その飾り方もさまざまである。

パーニュ以外の素材を用いることによって、デザインの印象が変わる。レースや縁取りテープを用いたり、パーニュと色を合わせた無地の布やサテン地、オーガンジーなど別の布を用いるもののほか、中にはパーニュの身頃に毛糸で編んだ襟元を組み合わせたものも観察された。

以上のように、各部のカットや装飾、用いる素材、それぞれの組み合わせによって、幾種類もの形が創りだされている。これらの装飾はエバゼ、グランメールなどにも使われているが、プラケにおいてもっとも多くの種類が観察された。また、基本モデルごとに装飾の傾向があり、エバゼは、襟元や袖に各種のカットや装飾が施されるほか、広がる裾を、ギャザーや大きなプリーツ、あるいは襷を寄せずにフレアーにするなどして印象を変えていた。グランメールは、基本的な形はそのままだに、胸元や袖、裾にレースを並べつけたり、ダンを何列にも並べるなどして豪華な印象に見せることが多い。デミニは、襟元や裾のカットに工夫がみられるほかは、金銀に光る糸などを用いて縁取りの刺繍をするものがほとんどで

写真 13. 袋状に縫ったもの（右上）を裏返しモチーフ（右下）を作る（筆者撮影）

写真 14. 台紙で大まかな枠組みを作り、モチーフ同士を縫いつける（筆者撮影）

写真 15. 裾にモチーフをつけたスカート（筆者撮影）

写真 11 ~ 15 モチーフの製作

あった。そして、簡素な仕立のヨルバは、何の装飾もされないのが普通である。

3.2.2. 流行について

既にみたように、プラケ、エバゼ、グランメールの基本モデルは女性の年齢や社会的地位と結びついて着用されているが、襟元や袖など各部に用いられるカット、装飾は、女性の社会的背景と結びつくよりもファッションの要素が強く、流行り廃りがある。たとえば袖に着目すると、1990年代初頭には、膨らんだ大きな袖が流行していたが（写真 16）、その後は裾広の長袖や、短い袖など、流行の袖は徐々に小さくなっていった。2006年4月から2007年3月の調査中には、袖のないデザイン（写

写真 16. 1990年代初めに流行したとされる袖の大きなモデル（撮影者不明）

写真 17. 2006年に流行していた袖なしのプラケ例（筆者撮影）

写真 18. モチーフの例 1 (筆者撮影)

写真 19. モチーフの例 2 (筆者撮影)

写真 20. モチーフの例 3 (筆者撮影)

真 17) が流行していた。

調査期間中にとみに観察されたのは、既にみたモチーフを使った衣服である。モチーフは、2005 年頃から流行しはじめ、2006 年に全盛を迎えた後、2007 年には減少しはじめていた。調査当時によくみられたものは、モチーフを数多く作って襟元や裾に並べて一周させたり、あるいは身頃の前面や袖など、ある一定の場所に服地を用いず、その場所をモチーフを敷き詰めることでかたちをつくるなど、モチーフを多用するものであった(写真 18～21)。ある仕立屋によれば以前にもモチーフが流行したが、当時はモチーフを 1 つなどごく少数、アクセントとして胸元などにつけていたという。

聞き取りでは、このほかにもカットや装飾などの流行が、数ヶ月から数年のサイクルで移り変わることが明らかになった。聞き取りをした仕立屋の回答は必ずしも流行時期などが一致するものではなかったが、しかしどの仕立屋も、あるカットや装飾が一時期多くの女性に好まれ、しばらくして用いられなくなったり、あるいはその後再び用いられるようになるなどの変化について言及した。

冒頭で、ブルキナファソにとってコートジボワールが重要な出稼ぎ先となっており、地域同士のつながりが強いことについて述べたが、聞き取りをおこなった多くの仕立屋が、ボボジュラソの流行は、コートジボワールの大都市アビジャンの流行に追随していることを指摘した。実際に、客が注文の際に参考にするものに衣服の写真があるが、この多くがアビジャンなどの町中で撮影されたスナップ写真である。また、腕のよい仕立屋の多くはコートジボワールで修行あるいは営業の経験があると

いう意見が多く聞かれた。聞き取りを行った中で、修業時代をアビジャンで過ごしたある仕立屋は、アビジャンでの営業を経てブルキナファソに戻り、ボボジュラソで自分の店を開いたとき、当時アビジャンで流行していた服を仕立てても客に受け入れられなかったが、しかし 2 年後、その流行がボボジュラソにも届き、客から求められるようになったと語った。仕立屋によっては、アビジャンの流行がボボジュラソにたどり着くまでの期間は数か月という回答もあったが、経済都市として発展するアビジャンは、パーニユを用いたファッションの中心地であり(Rabine, 2002: 6)、アビジャンのファッションが、現在のボボジュラソのファッションに大きな影響を及ぼしていることは明らかなようである。

4. まとめと考察

本論文は、パーニユが普及する都市のひとつであるボボジュラソの事例をもとに、パーニユの仕立に着目し、パーニユがどのような形に仕立てられ身につけられているかを明らかにした。ここでは本論文の調査結果から明らかになった、ボボジュラソにおけるパーニユを用いた衣服の特質についてまとめたのち、この衣服の普及の背景について考察する。

4.1. ボボジュラソにおけるパーニユを用いた衣服の特質

ボボジュラソにおける調査で明らかになったパーニユを用いた衣服の特質は、次のようにまとめられる。

はじめに、女性の間でのパーニユの着用割合の高さを

写真 21. モチーフの例 4 (筆者撮影)

指摘できる。市内でおこなった定点観測で、女性の通行人の約6割が、上衣とスカートまたは巻き布という組み合わせ、あるいは洋服の上着と合わせる巻き布などとしてパーニュを身に着けていた。パーニュは調査地の女性の間で服地としてかなり浸透していることがわかる。

パーニュは、同じ形を見つけるのは困難と思われるほど多様な形に仕立てられるが、その多様さは、パターン化された型とその応用によって主に成り立っていることが明らかになった。パターン化された型のことを本論文では基本モデルと呼んだが、定点観測では、パーニュの衣服の上下で地点 A を通過した女性のうち約6割が、4種の基本モデルのいずれかを身につけていた。ボボジュラソの定番とされるブラケ、エバゼ、グランメールの3種と、調査当時流行していたデミニである。このような基本モデルに対し、その襟元、袖、裾などの各部に、さまざまなカットや装飾が用いられることによって、たとえば同じブラケでも、同じ形をみつけるのが難しいほどのバリエーションが実現されている。

このような複数の基本モデルとその応用に加え、洋服のジャケットのような形など、調査中ごく少数の女性によってのみ着用され、基本モデルには分類できないものもあった。このような少数の形もまた、上衣とスカートまたは巻き布という共通の様式の中で用いられ、仕立の形の多様さを広げていると考えられる。

市内での観察や仕立屋への聞き取りから、基本モデルの中で定番とされるブラケ、エバゼ、グランメールの3種は、それぞれの着用にあふさわしい年代や社会的地位があると考えられていることがわかった。たとえばウエストの締まったブラケは、未婚の女性が主に身につけるも

のであり、既婚女性の間では一部に限られるとされ、さらに高齢の女性にいたっては、ブラケを身につけると周囲から敬われないとされた。また一方で、民族や信仰の別による着用の違いはほとんどみられないという意見が大半を占めた。パーニュを用いた衣装は、民族や信仰の別にかかわらずボボジュラソの女性の間で共通に身につけられていること、また、年代や社会的地位によってふさわしい型があるものの、このように着分けられながら、幅広い年代の女性が身につけているということがいえる。ただし、この着分けは必ずしも西アフリカの広域に当てはまらないと思われる点について記しておく必要がある。ダカールのファッションについて記した Rabine (2002: 30) を参照すると、本研究のボボジュラソでの調査で既婚女性が好む型とみなされているエバゼが、若い娘たちが好む型とされている。

女性の社会的背景と結びつくと考えられる基本モデルに対し、その各部に用いられる多様なカットや装飾は、数か月～数年ごとにその流行が移り変わることがわかった。この流行には、特に隣国コートジボワールの大都市アビジャンの影響が強いとされた。

基本モデルについては、先行研究においてその起源が明らかにされているものもある。エバゼやグランメールは現在のセネガル、プーブーは西アフリカ内陸部、ヨルバはナイジェリアというように、西アフリカ各地において、ヨーロッパやアラブ世界の人びととののかかわりの中で形作られたものとされる。西アフリカ各地で形作られた衣服の形が、ボボジュラソにも伝わり、現在まで用いられていると考えることができる。

4.2. パーニュを用いた衣服の普及の背景

以上のように明らかになったパーニュを用いた衣服の特質をふまえて、その普及の背景についてどんなことが考えられるだろうか。

今回の調査で明らかになった、ボボジュラソで観察されたパーニュを用いた衣服の特質として、パターン化された型とそこに組み合わせられるカット・装飾、さらにパターンから外れたデザインも含め、パーニュという布を用いて無数の衣服の形が展開し、さらに流行が頻繁に更新される点が挙げられる。このような形の多様さとその変化が、パーニュを用いた衣服の普及を考える際に重要であると思われる。

世界中に洋服が行き渡り、民族衣装が失われてゆく背景には、当然ながら人びとの生活の変化、とりわけ西洋化がある。民族服の成立条件について述べた杉本は、「民族服が民族の文化的要素である限り、そこには進歩があり変容がある。しかし、生産手段と生活環境が変わらな

いかぎりその変化はきわめて緩慢である」(杉本, 1975: 39)とし、民族服と人びとの生活の結びつきに言及している。生産手段や生活環境が変容したとき、人びとが身につける衣装もまたそれにともなって変容するということであろう。これに関連して、急速な経済発展を遂げる中国において、麗江ナシ族が依然として高い民族衣装の着用率を保持する背景について、北川と李は「近・現代において、社会情勢が変容する節目節目で、非常に柔軟な発想に基づき民族衣装デザインの改良をおこなっている点」(北川・李, 2008: 61)をあげている。「その時代の要請にあったデザインをうまく取り込むことができているからこそ、民族衣装の着用率が高い」(北川・李, 2008: 61)というのである。つまり、洋服に取って代わられ失われてゆく民族衣装は、人びとの生活の変化に対応できなかったと考えることができる。

また、ファッションという現象が西洋近代特有のシステムであり、それ以外の地域には存在しないと論じられるとき (Hansen, 2004: 372)、西洋の衣服とその他地域の民族衣装の着衣の実践を大きく分け、ファッションを西洋特有のものとせしめるのが西洋の衣服の一時的性であるとする意見がある (Rovine, 2009: 134)。洋服が次のシーズンに向けて先を急ぎ、「絶え間ない未来」を連想させるのに対し、その他多くの地域の衣服は「民族学的現在時制」であるというのである (Rovine, 2009: 134)。

パーニュを用いた衣服は「民族衣装」ではないものの、世界的に広まる洋服とは異なる地域独自の衣服である。以上の議論をパーニュを用いた衣服に当てはめると、本研究で明らかになった特徴、つまりパーニュという布を使って、パターン化した型、パターンから外れた形も含め様々な形が実現されること、そのバリエーションに流行があつて短期的に更新されることが、時代の要請にあったデザインを衣装に取り込み今なお身につけられる民族衣装、また民族学的現在時制にとどまらず変化し続ける洋服と共通しているといえる。パーニュを用いた衣服が現在なお洋服に対して競争力を持ち普及する背景の一つには、多様な形を実現できる柔軟さと、絶え間なく移り変わる一時性を備えている点があると考えられる。

最後に、本論文で詳細に分析することはできなかったが、各基本モデルの起源が西アフリカ各地に認められることや、現在のボボジュラソとダカールでエバゼの着用には異なる傾向がある可能性があること、アビジャンから発信される流行がボボジュラソの女性の衣服に影響を与えていることなど、パーニュはその流通圏である西アフリカをはじめとする地域において一様ではなく、各地の歴史や現在の都市間・地方間の関係性などを反映しながら、さまざまに身につけられていることが考えられる。

今後もパーニュやパーニュを用いた衣服について研究を進めるにあたり、地域ごとの特性に留意する必要があることを付け加えておきたい。また、絶え間なく移り変わり洋服に対する競争力を保つ衣服の生産を支えているのが、西アフリカの地域経済を下支えするインフォーマルな小規模産業の一つである仕立屋である点も着目に値する。西アフリカ独自の衣服文化を支える仕立業について、その商業形態に注目していきたい。

謝辞

本論文のための調査は、文部科学省の21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」によって実現しました。調査及び執筆にあたっては、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の島田周平先生、山越言先生からご指導いただきました。またボボジュラソでは、サンカラ・エドゥアールさんをはじめとする仕立屋のみなさんや、パーニュの着用者である女性の方々の協力のおかげで調査を行うことができました。記して感謝申し上げます。

注

- 1) *pagne* とは、仏語で腰から巻く布を表す語である。仏語圏アフリカでは、本論文で扱うプリント生地を特に指して用いられる場合もある。本論文では、プリント生地を指す語として用いる。
- 2) なお、現在は洋服が主流とされる東アフリカでも、カンガと呼ばれるプリント布が身につけられ、西アフリカのパーニュとともに知られている点について記しておく必要がある。3枚をひと組とし、仕立てて身につけられることの多いパーニュに対し、カンガは2枚ひと組で、加工せず巻いて身につけられることが多いとされる。カンガはまた、ことわざ等のメッセージが書かれているのが特徴である。(国立民族学博物館, 2006 等)
- 3) 工業製綿布に簡素な縞模様を染め付けたもので、セゲバナ *segebana* と呼ばれていた。ジュラ語で疲れ・労苦 *sege* が終わった *bana* という意味である。同村ではもっぱら畑作業用に用いられていた。
- 4) *which can take a seemingly infinite variety of forms*
- 5) *la chemise porte en elle toute les fantaisies de l'imagination créatrice des couturiers africains*
- 6) ただし徒歩、自転車、二輪車など、女性の衣服全体が確認できる通行方法に限り、自動車での移動は対象外とした。
- 7) 「プリンセス *Princesse* (プリンセス)」と呼ぶ仕立屋もいた。また、ウエストがよく締まっているものとそれに比べて少しウエストにゆとりのあるものを区別し、前者をプリンセス、後者をブラケと呼ぶという回答もあった。
- 8) 本論文の現地調査でも、マリニエールと呼ぶ仕立屋もいた。
- 9) ただし、西アフリカにおけるイスラームと衣服には強い

ながりがみとめられているものの、衣服を身につけることへの嗜好はイスラームの範囲を超えて広まっていることが指摘されている（竹沢, 1990; Roberts, 1996）。

参考文献

- 遠藤聡子 (2006)「ブルキナファソにおける女性の装いに関する研究：衣服の所有と利用を中心に」『国際服飾学会誌』29: 70-81.
- 深沢太香子, 熊谷伸子, 梶原裕, 織本千英子 (2008)「東アフリカにおける民族服カンガの日常着としての受容に関する社会学および生理学的考察」『服飾文化共同研究報告 2008』24-28.
- 浜田久仁雄 (2003)「民族服：ファッション的考察」成実弘至編『モードと身体：ファッション文化の歴史と現在』角川書店, 304-321.
- 北川恵美, 李麗萍 (2008)「民族衣装に見る文化の創造的継承」北海道大学観光創造フォーラム『ネオツーリズムの創造に向けて 報告要旨集』61-62.
- 国立民族学博物館編 (2006)『更紗今昔物語：ジャワから世界へ』.
- 嶋田義仁 (1990)「裸族文化から衣服文化へー西アフリカ内陸社会における「イスラム・衣服文化複合」の形成ー」『国立民族学博物館研究報告』別冊 12: 447-529.
- 杉本正年 (1975)「民族服成立の条件」『服装文化』145: 36-46.
- 竹沢尚一郎 (1990)「イスラムと西アフリカの物質文化」『国立民族学博物館研究報告』別冊 12: 533-593.
- Akinwumi, Tunde M. (2008) "The "African Print" Hoax: Machine Produced Textiles Jeopardize African Print Authenticity", *Journal of Pan African Studies*, 2(5): 179-192.
- Atlas de l'Afrique (2005) *Burkina Faso*, Paris: Les Editions J.A.
- Bellow, Lédji (1986) "Je cours plus vite que ma rivale : paroles de pagnes chez les Gen-mina du Sud-Togo", *Cahier de littérature orale*, 19: 29-67.
- Bickford, Kathleen E. (1995) *Knowing the Value of Pagne: Factory-printed Textiles in Côte d'Ivoire*. Ph.D. thesis. Indiana University.
- Brooks Jr., George E. (1976) "The Signares of Saint-Louis and Gorée: Women Entrepreneurs in Eighteenth-Century Senegal", in Nancy J. Hafkin and Edna G. Bay *Women in Africa: Studies in Social and Economic Change*, Stanford: Stanford University Press, pp. 19-44, and 286-287.
- Byfield, Judith (2004) "Dress and Politics in Post-World War II Abeokuta (Western Nigeria)", in Allman, Jean ed., *Fashioning Africa: Power and the Politics of Dress*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, pp. 31-49.
- Cassara, Cécile (1994) "Wax et Fancy, une histoire complexe", in Claude Fauque et Otto Wollenweber *Tissus d'Afrique*, Paris : Editions Alternatives, pp. 62-71.
- Coquet, Michèle (2001) *Textiles Africain*, Paris : Adam Biro
- Domowitz, Susan (1992) "Wearing Proverbs: Anyi Names for Printed Factory Cloth", *African Arts*, 25(3): 82-87, 104.
- Etienne, Mona (1980) "Women and Men, Cloth and Colonization: the Transformation of Production-distribution Relations among the Baule, Ivory Coast", *Cahier d'Etudes Africaines*, 65: 41-64.
- Fauque, Claude et Otto Wollenweber (1994) *Tissus d'Afrique*, Paris : Editions Alternatives.
- Freidberg, Susanne Elizabeth (1996) *Making a Living: A Social History of Market-Garden Work in the Regional Economy of Bobo-Dioulasso, Burkina Faso*, Ph.D. thesis. University of California at Berkeley.
- Gott, Edith Suzanne (1994) *In Celebration of Women: Dress, Performance, and Identity in Contemporary Asante*, Ph.D. thesis. Indiana University
- Hansen, Karen Tranberg (2000) *Salaula: The World of Secondhand Clothing and Zambia*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Hansen, Karen Tranberg (2004) "The World in Dress: Anthropological Perspectives on Clothing, Fashion, and Culture", *Annual Review of Anthropology*, 33: 369-392.
- Kruger, Colleen E (2006) *Cloth in West African History*, Lanham: Alta Mira Press.
- Kroese, W.T. (1976) *The Origin of the Wax Block Prints on the Coast of West-Africa*, Hegelo, Hengelo: NV Uitgeverij Smit.
- Mendy-Ongoundou, Renée (2002) *Elégances Africaines: Tissus Traditionnels et Mode Contemporaine*, Paris: Éditions Alternatives.
- Ministère de l'Économie et des Finances, Ministère de l'Administration Territoriale, Direction du 2e Projet de Développement Urbain Mairie de Bobo-Dioulasso (1997) *Index des Voies de la Ville de Bobo-Dioulasso*, Tunis : PICTURA ImPress.
- Mustafa, Huda Nura (1997) *Practicing Beauty: Crisis, Value and the Challenge of Self-Mastery in Dakar, 1970- 1994*, Ph.D. thesis. Harvard University.
- Nielsen, Ruth (1979) "The History and Development of Wax-Printed Textiles Intended for West Africa and Zaire" In Justine M. Cordwell and Ronald A. Schwalz eds., *The Fabrics of Culture*. The Hague: Mouton: 467-98.
- Picton, John (1995) *The Art of African Textiles: Technology, Tradition and Lurex*, London: Barbican Art Gallery; Lund Humphries Publishers.
- Picton, John (2004) "What to Wear in West Africa: Textile design, Dress and Self-representation", in Carol Tulloch ed., *Black style*, London: V & A Publications, pp. 22-47, 122.
- Rabine, Leslie W. (2002) *The Global Circulation of African Fashion*. Oxford, New York: Berg.
- Roberts, R. L. (1996) *The Two Worlds of Cotton: Colonialism and the Regional Economy in the French Soudan, 1800-1946*, Stanford: Stanford University Press.
- Rovine, Victoria. L. (2009) "Viewing Africa Through Fashion", *Fashion Theory* 13 (2): 133-140.
- Sanogo, Sanata (1992) *Les raisons sociales de l'appellation des pagnes en milieu urbain burkinabè Etude auprès de la population féminine des villes de Ouagadougou et de Bobo-Dioulasso*, Mémoire de Maîtrise de l'Université de Ouagadougou.
- Touré, Abdou (1985) *Les petits métiers à Abidjan: l'imagination au secours de la "conjoncture"*, Paris : Karthala.

(Summary)**Popularization of Factory-Printed “Pagne” Dress in West Africa:
A Case from Urban Burkina Faso**

Satoko ENDO

Embassy of Japan in Burkina Faso

Western clothes seem to prevail and drive out local dresses around the world. In West Africa, however, women wear another kind of dress as daily and holiday clothes. It is an ensemble made with “pagne”, factory-printed cloth first made in 19c Europe and then brought to West Africa. It is not “traditional” dress but typical of the area. This article analyzes the forms of “pagne” ensemble (especially upper wear) worn among women in Bobo-Dioulasso, second largest city in Burkina Faso

to clarify the background for its popularization in West Africa.

The pagne ensemble has “infinite variety of forms” (Picton, 2004) and its fashion comes and goes continually. This characteristic resembles European clothes in terms of temporality, which devise between the Western and non-western dress. This is one of the major backgrounds for the popularity of pagne ensemble.